社説余滴

友野（ともの）　賀世（かよ）

人生の終わり方を考える

「あれでよかったのか、と今でも思う」

2月に京都府医師会が開いた終末期医療を考える集会。参加者は、親を看取（みと）った体験を次々と口にした。

府医師会は、終末期の医療を巡って家族と医師の間がこじれる事態が相次いだことを踏まえ、数年前にこの集いを始めた。こうした事態を防ぐには、医師と市民が普段からざっくばらんに話すことが欠かせないと考えたからだ。

年齢を重ね、やがて訪れる最期を、どこで、どのように迎えたいのか。本人がどうしたいのかがわからなければ、周りは悩む。本人の思いが共有されていることは、現実に「その時」が訪れた際に大きな意味を持つ。

昨年亡くなった人は推計で127万人。高齢者の増加で亡くなる人の数は増え、2025年には154万人になると見込まれている。医療技術の進歩で、人生の最終段階においても受けうる医療の選択肢は広がった。「高齢者本人の望み」がクローズアップされる場面も増えるだろう。

自分はどうしたいのか。

何事もないときに、自分の命の終わり方を考えるのは気が進まない、周りにしてみれば「そんな話題を持ち出すのは縁起でもない」と、つい先送りしてはいないだろうか。

死にまつわる話はタブーとされがちだった。13年の調査でも、人生の最終段階での医療について、一般の人の6割弱は「家族と全く話し合ったことがない」と答えている。

ただ、これはその人が自分の人生をどう生きるかの一環、「自分の人生の最終段階を、どう生きるか」ということなのだ。

「ご飯が食べられなくなったらどうしますか？」

滋賀県東近江市の医師・花戸貴司さんは、著書のタイトルにもなったこの言葉を、往診の際や診療所の外来で患者に投げかける。

「お迎え」が遠からず来そうな状態になったときに、入院したいか、栄養を取るための点滴を望むか。まだお迎えには間がありそうなうちから、折に触れて患者とやりとりする。「患者さんが、最期まで自分らしく生きるために必要な準備と思っています」

取材で高齢者やその家族、医療・介護の関係者に話を聞いていると、最終段階をタブーにせず語る雰囲気が少しずつ広がっているのを感じる。重く、大切だからこそ、普通に語り合いたい。それが本人の生き方の尊重につながる。

（社会保障社説担当）